

編集後記

様々な分野の所員から原稿を頂いて、やっと年度内刊行ができそうである。特集を組むことは「特別研究」や「出版助成」などの制度が整うのにつれ困難になってきました。これはこれでまた意味のある発展だと思います。それ故に、当研究所としての年報のあり方を模索していかなければならないでしょう。今年は再発足して50周年になります。これまでの諸先達の努力の成果を受け継ぎつつ、更なる次へ踏み出したいものです。

大学も「冬の時代」に突入しました。少子化と不況の影響で志願者が減少。受験生とその家族には「広き門」になって安心でしょうが、経営を考えなければならない私立大にとってはうれしいことではない。地方自治体の赤字はトップのボーナス減給などで凌ごうとしているが、本質的解決にはなるまい。我が専修大学にも財政改革、リストラの波が押し寄せてくるかもしれない。より魅力ある大学は小手先で学生を集める工夫をするのではなく、優れた研究活動が行われ、落ち着いた教育環境が整っていることである。時間と費用がかかるかもしれないが正攻法を選べる余裕を専修大学はまだ持っていると思う。

さて今年は風邪の大流行で、多くの方が、高熱と咳で苦しまれたようです。亡くなられた高齢者も多いようです。かく言う私も二日間寝込んでしまった。最も残念なことは長年本研究所の所員として活躍され、また、かつては事務局長としても貢献されてきた加藤佑治先生が肺炎で2月に亡くなられたことである。教育の場や研究の場などでの几帳面な仕事ぶりなどいろいろな思い出が浮かんできますが、今は心からご冥福を祈るのみです。

最後になりましたが、本研究所に対して毎年多大な援助を下さる「学校法人専修大学」に感謝の意を表したい。また公人社編集担当、大出明知氏は実質的な仕事を手際よく処理されて年度内刊行を実現して下さいました。感謝申し上げます。最後に執筆者、社研事務局編集と出版社との連絡調整で労を惜しまれなかった当研究所事務職員竹内佐和子さんに感謝申し上げます。

(編集担当：黒田彰三)